

六花



1

2024

りっかはいくかい

百万ドルの初明り

山田六甲

六甲山百万弗の初明り

大福茶にせよと頂く年の暮

前浜の鱈子で年の酒を酌む

数の子の好きな子孫や犬までも

新年の蜘蛛のとびちやん壁にあり

持ちきれぬ大根が来てクリスマス

アレのアレ日本一の秋晴に

十二月七日は神戸開港日

干し柿を吊して妻は鍼師待つ

初湯には別府へ行かう女夫婦

志章かにして年酒くむ

靴下を頂いてより聖夜待つ

聖夜にとドメーヌ・ローラン・ブルゴーニュ

猫飼ふというて叱られる師走

ストーブの灯油を買ひに行く深夜

討ち入りの夜中は雨となりにつけり

山陰の美魔女から柚子お風呂にと

冬ぶどう房なりに来る明日冬至

桜山記来年なしと歳つまる

柚子湯にと尾上の姉にもらひけり

阿波路なる冬新玉葱の歳暮かな

夢風撰卷頭

柳眉へのかたち決まらず初鏡 草場つくし

柳眉というのは柳の葉のように細く美しい眉のことで、中国では美人の眉のたとえとして使われる言葉。また一説には柳眉の女性は家庭運に恵まれる幸せな人。だから化粧もその辺を意識してか無意識にか眉を描くにも一層気をつける。初鏡の句で柳眉という言葉を見たのは始めて。

ろく

十三夜百鬼夜行の仮装行く

延川五十昭

じゅうさんやひやきやぎようのかそうゆく

百鬼夜行は夜古都では鬼や悪魔が横行する。その夜には人は出歩くことをやめ、静かに家で過ごす。習わしだった。あながち古い時代の話ではなく今でも百鬼夜行はある。夜には出歩かない方がよいと昔からいうのはあながち悪いことではなく危険を防止するためにも各家庭で徹底して夜遊びをさせないことだ。子どものころは正月三が日だけ親に黙って夜遊びに行けた。深夜に帰って母が並べておいて呉れたお節を私は餓鬼になって黙々食べて寝た。ろく

特別同人

野外能 ◎ 笹村 政子

近況のいつも絵葉書小鳥来る

白南風や箆に雑魚干す抜け小路

ひと抱へごとに括られ萩の花

秋の蚊の厨の母に払はるる

あぶれ蚊の足許に来る野外能

だんまりを通し林檎の丸かじり

新涼やわが身を打てる杖の音

朝露を踏めば飛び出すもの眩し

月の宴記者に一句を所望さる

(京都養源院)

杉戸絵の象の足音十三夜

あぶれ蚊の足許に来る野外能

「あぶれ蚊」というのが滑稽な表現。薪能に来た見物集から充分生き血を吸わしてもらったはずが中には生き血を吸うことが出来なかつた蚊に違いない。と作者を刺した蚊への憤りと負け惜しみが愉快。月見のたきぎ能を見物していたら新聞記者がインタビュウしてきた。そのときここで一句どうでしょう?と言われた。やはり俳人はそういう佇まいが判るものである。

「小鳥来る」に絵葉書を匂わせてある。たまにしか便りを呉れない人(友人か)から便りが来たと思えばいつも絵葉書で随分素っ気ない、と思うが、便りのないのは元氣な証拠という言葉もあるから絵はがきだけでも十分に親孝行であるのだ△杉戸絵は養源院の俵屋宗達の白象図(はくぞうず)を描いた句。

特別同人

菊日和 ◎ 志方 章子

秋の日の零る城址や夢のあと

中空を縫れてゐたる赤蜻蛉

虫の音に考へごとの途切れけり

のんびりとしてはをられず菊日和

菊日和一人過ごすは勿体無く

朝顔の実を取つておく小封筒

間延びせし声に鳴きたる昼の虫

零余子飯夫の好みの味ならず

柚子味噌やふと蘇る母の味

母の声耳を撫でゐてそぞろ寒

菊日和一人過ごすは勿体無く

こんな良い菊日和に私一人で過ごしているのはもったいなくて申し訳ないというのだ。今まではご主人のことを句に露わに詠んできたが、この句を見るとその寂しさから少し離れようとしているのが第三者にはうれしい。菊日和というのは菊の香がしみ通るように澄んだ秋の日のことで「勿体なく」はすめらみこと皇へのもったいなく、畏れ多くもを含んだ意味の言葉に通うか。虫の音の作品、何か考え事をしている時に虫の音が遮った。考え事がとぎれたというのが文芸的で、ある思考が虫の音に飛んだ、というところか。それが風雅でもある。このところ章子は風雅をせめるところまで進んで来たといふべきか。

特別同人

賀古の駅 ◎ 井田ヤス子

そつと触れ思ひきり触れ猿茸

秋蝶の影濃く乱舞してをりぬ

酔芙蓉いつもその人通る頃

コスモスは庭にランチョンマットにも

夜長し賀古かこの駅家うまやの書を読めば

後の月渡しの跡にあふぎけり

除夜篝星にならんとくづれけり

袈裟きらと声のびやかに初勤行

坊に食ぶ花びら餅の薄あかり

玉垣の夫の名ちらと初詣

夜長し賀古かこの駅家うまやの書を読めば

「ひろかずのブログ」によれば（7世紀、大和政権（奈良を中心とする政権）は、天皇を中心に勢力を強め、その勢力を更に拡大するために道を整備した。とりわけ、奈良と九州の太宰府を結ぶ山陽道は重要な道であった。街道の途中には駅（うまや）を設けて、官人の旅・租税の運搬にあたった。野口（加古川市野口町）に、山陽道最大の駅、賀古の駅（かこのうまや）がおかれた。山陽道最大ということは、日本で最大の駅が野口にあったのである。他の駅では、多くて20頭ほどの馬が置かれていたが、賀古の駅は、40頭を数えた。とあった。秋の夜長に歴史書に読みふけるのもヤス子らしい。除夜篝の作品は「篝火が崩れて火の粉が舞ったのも星になろうとしたのだろう」と文芸的に表現。ヤス子はまだまだ若い精神に溢れている。

鯰のひげ ◎ 廣畑 育子

実り田の一輛列車過ぎ行けり

彼岸花丹波篠山商家群

どの畦も群なしてゐる曼珠沙華

曼珠沙華辿りて行けば余所の軒

彼岸花三昧の日や炎色

ほむらいろ

秋の池鯰のひげの覗きゐて

秋鯰ぶつかり合うて三つ巴

泡立草暗き本丸登山口

さやけしや大水甕を玄関に

自転車の片手に提ぐや藤袴

秋の池鯰のひげの覗きゐて

「秋の」といって随分大づかみな季題の扱いでおどろく、水澄むとか何とか言えなかつたのかと思うが育子には育子の計算があつてのことか。確かにナマズが住むのは池か川の水の中。石垣か何かの影から鯰の髭が見えている。鯰の生態をよく知らないが私の子ども頃の経験では鯰は少し穴や影から髭を出していたのを見た。育子は初冬に風邪を引いて長引いているらしい。大事に至らなければいいがと祈るばかり。私の古い手帳をみていたら小津安二郎が「新しいということそれは古くならないこと」と言つたと。よくわからないうが、考えて見る価値はありそうだ。私も常にそれを考えている。年頭にあたつてもう一度考えてみようと思つている。

足のあと ◎ 江見巖

花園や畑掘らるる足のあと

手に触れて何を求める萩の花

萩の花なだれてきては人を呼ぶ

救急車消防走る敬老日

赤い羽根つけて出かける厨妻

遊撃戦のゲリラ豪雨や村祭

軍艦の側を回るや鰯の群れ

赤とんぼ少尉の一機帰らざる

婚姻色待ちにまつたる鮭揚げる

上に一つ下に一つの熟柿かな

花園や畑掘らるる足のあと

この句には季題が二つあり花園か猪とともに秋の季題。畑はだれかに掘られたのであろうが、おそらく猪の仕業であろう。畑に猪の掘った足あとが歴然としており、花の球根や根を食い荒らされた様子を詠んだ。上に一つ下に一つの熟柿の作品は平明な写生句で当たり前ではないかと思うが、このような句を積み上げているうちに驚くような作品に出会えると思う。

初鏡 ◎ 草場つくし

水澄むや旅の土産に石一つ

老いの背を秋風が押す法隆寺

姉の愚痴半眼で聞く夜長かな

台風の子報違はず黒き雲

芒原通り抜けたる風白し

秋の蚊や痒みも連れて吟行す

秋の蚊をいなしながらの立ち話

もう一度声聞きたくて天の川

真つ白き巽櫓や梅雨明くる

柳眉へのかたち決まらず初鏡

柳眉へのかたち決まらず初鏡

この句覚えやすく「柳眉を初鏡」にもつてきたのは
独創的で覚えやすく出色の作品。夢風撰。

もうひとつ「旅の土産に石一つ」という意外性もあり
あれこれと想像が膨らむ。物言わぬ石に物を言わせた
秀句である。たとえば糸魚川フォッサマグナの翡翠
ではないと思う。きつと路傍か積で見つけた石がすぐ
く気に入って、土産にする人も貰う人も石一つでも喜
ぶ風雅の人であろう。

花梨の実 ◎ 田尻とふぶ

幸の家洗濯物の整然と

うそ寒やししゃモの天ぷら発泡酒

守つたるフロントグラスにキリギリス

花梨の実「自由にお取り下さい」と

鈴虫のケースで鳴くはコオロギも

秋が来た老人悲しく争へる

木許に大の字に寝て秋日浴む

秋雨や黄檗の堂の静まれり

金色の百枚棚田ドローン飛ぶ

擦れ違ふ列車霧から霧に消え

金色の百枚棚田ドローン飛ぶ

稲の実った千枚田にドローンが飛んでいる風景を詠んだのだが、何か示唆するものがあるように思えて、夢風撰三にしようかと思わされたが、惜しむらくは、一句目に季語がないと編集長の指摘があったのでやむなく外した。それは「幸の洗濯物」の句、気持ちのよい秋晴の光景のようなので「内に季あり」の句として鑑賞もできそうだ。だから次回からは季語にも注意をはらって投句するとありがたい。列車が霧から霧へとというシーンもそのパターンはすでにあるが棄てがたい。

初鏡 ◎ 草場つくし

水澄むや旅の土産に石一つ

老いの背を秋風が押す法隆寺

姉の愚痴半眼で聞く夜長かな

台風の子報違はず黒き雲

芒原通り抜けたる風白し

秋の蚊や痒みも連れて吟行す

秋の蚊をいなしながらの立ち話

もう一度声聞きたくて天の川

真つ白き巽櫓や梅雨明くる

柳眉へのかたち決まらず初鏡

柳眉へのかたち決まらず初鏡

この句覚えやすく「柳眉を初鏡」にもつてきたのは
独創的で覚えやすく出色の作品。夢風撰。

もうひとつ「旅の土産に石一つ」という意外性もあり
あれこれと想像が膨らむ。物言わぬ石に物を言わせた
秀句である。たとえば糸魚川フォッサマグナの翡翠
ではないと思う。きつと路傍か積で見つけた石がすぐ
く気に入って、土産にする人も貰う人も石一つでも喜
ぶ風雅の人であろう。

花梨の実 ◎ 田尻とふぶ

幸の家洗濯物の整然と

うそ寒やしシヤモの天ぷら発泡酒

守つたるフロントグラスにキリギリス

花梨の実「自由にお取り下さい」と

鈴虫のケースで鳴くはコオロギも

秋が来た老人悲しく争へる

木許に大の字に寝て秋日浴む

秋雨や黄檗の堂の静まれり

金色の百枚棚田ドローン飛ぶ

擦れ違ふ列車霧から霧に消え

金色の百枚棚田ドローン飛ぶ

稲の実った千枚田にドローンが飛んでいる風景を詠んだのだが、何か示唆するものがあるように思えて、夢風撰三にしようかと思わされたが、惜しむらくは、一句目に季語がないと編集長の指摘があったのでやむなく外した。それは「幸の洗濯物」の句、気持ちのよい秋晴の光景のようなので「内に季あり」の句として鑑賞もできそうだ。だから次回からは季語にも注意をはらって投句するとありがたい。列車が霧から霧へとというシーンもそのパターンはすでにあるが棄てがたい。

後の月仄か ◎ 巽恵子

お点前や朱色小紋の秋袷

明らかに風は秋色散歩道

秋天に通過列車のアナウンス

未草傾げるものありにけり

蜻蛉のつるみて高く横切れり

突として秋の訪れたたみ皺

更けるほど色深めゆく後の月

薄雲のかかりて後の月仄か

池の面に雨広ごりて十三夜

喧騒のデリカフェひとり秋の暮

薄雲のかかりて後の月仄(ほの)か

後の月は私も大好きな季節で仲秋の名月よりも風雅であるし風雅を攻めやすい。楽しみ方は「水に映った月」を味わうのが良いと昔から言われていて、後の月は十五夜の月にひと月遅れ、しかも十三夜の月である。いかにも日本人趣味の味わい方で、室町時代八代將軍足利義政が建てた銀閣寺は十三夜の月見をする為に建てた別荘だそうで銀閣寺の向側に作った山の上から、十三夜の月が錦鏡池(きんしょうち)の中の丸い石の上に鮮明に月が乗るし池に映った月を一晚楽しんでたという。月は映るが移るでもあるし、銀閣寺の壁は月に映えるように銀砂で塗られているらしい説も。掲句は十三夜なのにしかも薄雲がかかっているのも風雅の誠をせめているのだ。何かしら月には雲がかかっているのをよしとする気風もある。「デリカフェ」とはカフェインを取り除いた食品の店?やがて人々から忘れていくかも。つまり不易と流行の後者。

ブルーメの丘 ◎ 谷口一献

久々の厳戒態勢ハロウイン

大熊猫来て半世紀経ち冬隣

初冠雪ニユースで観るも秋うらら

コスモスの紅桃白と撓ひけり

ブルーメの丘咲き長けて秋桜

執着の心は持たず紅葉狩り

手鏡に頭頂捉へ秋深し

九階に亀虫舞ひて秋の暮

爽やけてふと立ち呑みに寄りにけり

花時計午前七時の秋の色

ブルーメの丘咲き長けて秋桜

長けるとは盛りの時期、になる、たけなわになる状態をいう。秋桜と結語におくとあきざくらと発音してコスモスとは言わないのが短詩の約束。ブルーメの丘とは調べて見ると滋賀県にある公園で、滋賀県・日野町にある大自然の中に作られた公園で3歳から遊べるキッズコースや大人も本格的に楽しめるアルプスコースらしくコスモスも美しいところ。カッブルで行くと夢のような公園であろう。兵庫県にもコスモスの美しいところは沢山あるが、この公園は一度行ってみたいとおもう。「咲き長けて」という表現も行楽気分を刺激する。「手鏡に」の作品。少し毛髪が気になりただのか、木の葉髪に、心配そうな顔つきを想像するだけで楽しい。くれぐれも葉鶏頭にならぬよう。そういいながら、爽やかな気候にふと立ち飲みによるなど一献さ
んらしい一句。